

怪物サニブラウン (20歳) 日本新「9秒97」 カール・ルイス氏絶賛

陸上・全米大学選手権(7日、テキサス州オースティン)男子100メートル決勝で20歳のサニブラウン・ハキーム(フロリダ大)が追い風0.8メートルの条件下、9秒97の日本新記録をマークした。2017年9月に桐生祥秀(23)＝当時東洋大、現日本生命＝が出した「9秒98」を0秒01更新し、日本勢初となる2度目の9秒台で3位。200メートルでも追い風0.8メートルで日本歴代2位の20秒08で3位となった大器が、2020年東京五輪ファイナリストへ弾みをつけた。日本の20歳が陸上大国の歴史にその名を刻んだ。「9秒97」。日本最速の称号をつかんで口にした言葉に大物感が漂った。「あまり実感はない。(後半に)ちょっとストライドが伸びてしまった。もうちょっと、いいタイムが出たと思う。」



晴天、追い風0.8メートルと好条件が整った。2走を担った400メートルリレーで今季世界最高の37秒97を出してから50分後。9秒台の自己記録を持つ選手が4人そろそろ100メートルのスタートラインに立った。かつてのこの大会の王者で、五輪での金メダル量産で日本でも有名なカール・ルイス氏(57)は「彼は素晴らしいアスリート」と高く評価した。現在は母校、ヒューストン大のコーチを務めており、現地でレースを見守った。「この大会は過小評価されているが、世界大会と同じくらいの大会。ここでうまくやれたら、他でもやれる。」と今後の活躍に太鼓判を押した。

サニブラウンが東京・城西高2年時の2015年7月に出した100メートルの自己ベストは10秒28。わずか4年で0秒31もタイムを縮めた。強豪フロリダ大では、多くの五輪メダリストを育てた米国出身のマイク・ホロウェイ監督に師事。「(日本と)考え方が全く違う。」という“短時間集中型”の個別メニューで、苦手なスタートを中心に鍛えてきた。条件は異なるが、16年リオデジャネイロ五輪に当てはめれば、9秒97は7位に相当する。日本勢における五輪の100メートル決勝進出

10秒48	神野 正英	新日鉄八幡	1975年5月31日
10秒40	清水 禎宏	鳥取松江西中	1979年10月6日
10秒34	飯島 秀雄	茨城東洋	1980年10月14日
10秒33	不埒 弘樹	法 大	1987年9月23日
10秒28	青戸 慎司	中京大	1988年9月11日
10秒27	宮田 英明	群馬県立大	1990年10月22日
10秒20	井上 慎 日 大		1991年5月17日
10秒19	朝原 宣治	同 大	1993年10月26日
10秒14	朝原 宣治	大阪ガス	1996年6月9日
10秒08	朝原 宣治	大阪ガス	1997年7月2日
10秒00	伊東 浩司	富士通	1998年12月13日
9秒98	桐生 祥秀	東洋大	2017年9月9日
9秒97	サニブラウン・ハキーム	米フロリダ大	19年6月7日 日本時間8日

者は、1932年ロサンゼルス大会で6位入賞した「暁の超特急」こと吉岡隆徳ただ一人だ。100メートル決勝からわずか45分後に行われた200メートル決勝で、日本歴代2位の20秒08をたたき出し、3位に入った。自己ベストを0秒05更新。日本勢初の19秒台をうかがう勢いで、リオ五輪に当てはめれば20秒08は3位に相当する。1時間半で臨んだ3レースで強烈なインパクトを残した。

2020年東京五輪では100メートルで日本勢88年ぶり、200メートルで初の決勝進出に期待が高まる。「まだ今後も速いタイムが出ると思っている、その都度更新していければ」とサニブラウン。目標は「地上最速」と語る若き怪物の可能性は限りない。